



野 田 遺 跡 墳

むこう

こう

じん

向 荒 神 古 墳

1981

松江市教育委員会

はじめに

荒神さんというものは、今でも農家の人々の間では怖れられている。その起源は定かではないが、昔、山林や雑草地だったところを私達の祖先が開拓して以来、蛇は何にもまして人間社会に対して恐怖の存在であったに違いない。古木に必ずワラ蛇が巻いてあるのはそのためである。

今回調査した向荒神古墳は、古墳の上に荒神さんが祀ってあり、地元の方々の厚い信仰の対象となっているが、古墳も荒神さんと同様、恐怖の念をもってさわらぬようにしてきたので、現在まで千数百年もの長い間、残されてきたのである。

計画変更により、この古墳が残されることになったのも、こうした気持が作用したからであろう。

私達はこの気持をこれからも大切に抱き続け、祖先の人々のお墓であることの認識に立って、謙虚に取り扱いたいものである。

昭和56年3月

松江市教育委員会

教育長 内田 榮

凡　例

1. 本書は、松江市が島根県（松江幹線街路整備事務所）の委託を受け、昭和55年9月16日から昭和56年2月2日までの内、計27日間を要して行なった野田遺跡及び向荒神古墳の発掘調査の概要報告である。

2. 発掘調査事業の組織は、下記のとおりである。

委託者　島根県知事　恒松制治

受託者　松江市　松江市長　中村芳二郎

主体者　松江市教育委員会　教育長　内田　榮

事務局　松江市教育委員会社会教育課

総括　社会教育課長　石飛　進

庶務会計　文化係長　足立千利（昭和55年10月まで）

同　上　中西宏次（昭和55年11月から）

文化係主事　加藤　睦

担当者　文化係主事　岡崎雄二郎

同　上　中尾　秀信

補助員　佐々木稔、加藤博己、有田茂雄

3. 発掘調査の作業にあたっては、下記の方々の協力を得た。（敬称略）

野津文子、野津キワ子、野津美江子、野津林子、野津美恵子、安達昌生

福島虎市、三島栄子、野津栄子、桑谷千代子、松本マサヨ、金津ミトシ

福島久子、長嶋久子、山崎多恵子

4. 遺物及び図面・写真的整理は、佐々木、中尾、岡崎の3名が行なった。

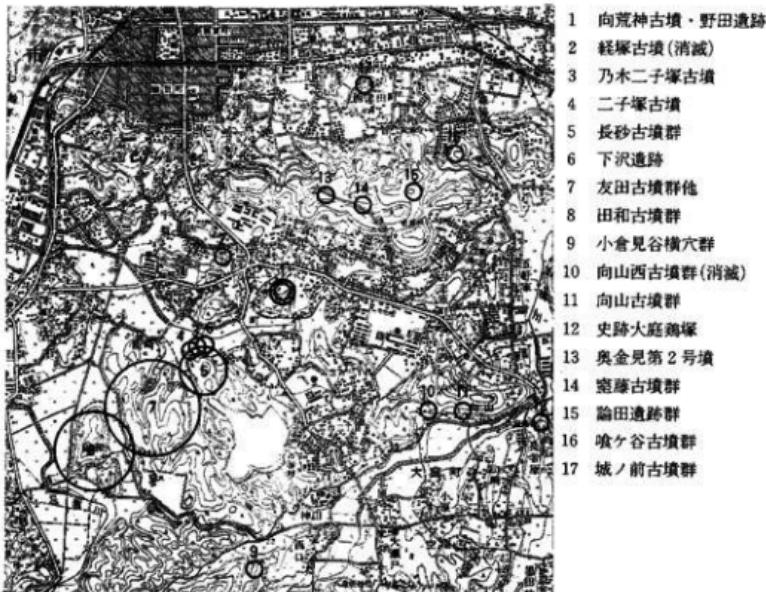
5. 本書の編集は、主として岡崎が行なった。

もくじ

I 調査にいたる経緯	1
II 遺跡周辺の歴史的環境	2
III 各遺跡の概要	11
1. 野田遺跡	11
2. 向荒神古墳	15
(1) 古墳の現状と調査の方法	15
(2) 遺構	15
(3) 遺物	19
まとめ	22

I 調査にいたる経緯

野田遺跡は、島根県（松江幹線街路整備事務所）から、道路改良工事計画の提示された後、昭和55年5月に予定路線内をくまなく踏査したところ、畠地において須恵器片を若干採集したので、遺物散布地として事前の発掘調査が必要であるとの判断から、島根県知事と松江市長の間で、発掘調査委託契約を昭和55年9月16日付で締結した後、昭和55年9月16日から、昭和56年2月2日までの27日間、^{図1}発掘調査を実施したものである。向荒神古墳は、一辺15mほどの方墳で、周知の遺跡として往昔から地元住民に知られていた。当初の工事計画では、道路が古墳の中心をとおるよう計画されていたが、古墳の上に荒神さんが祀られていることによって、古墳の西側に接して通るよう変更された。しかし、古墳の周辺が予定路線内にかかる可能性の強いことから、野田遺跡と同様、事前調査を実施することになった。

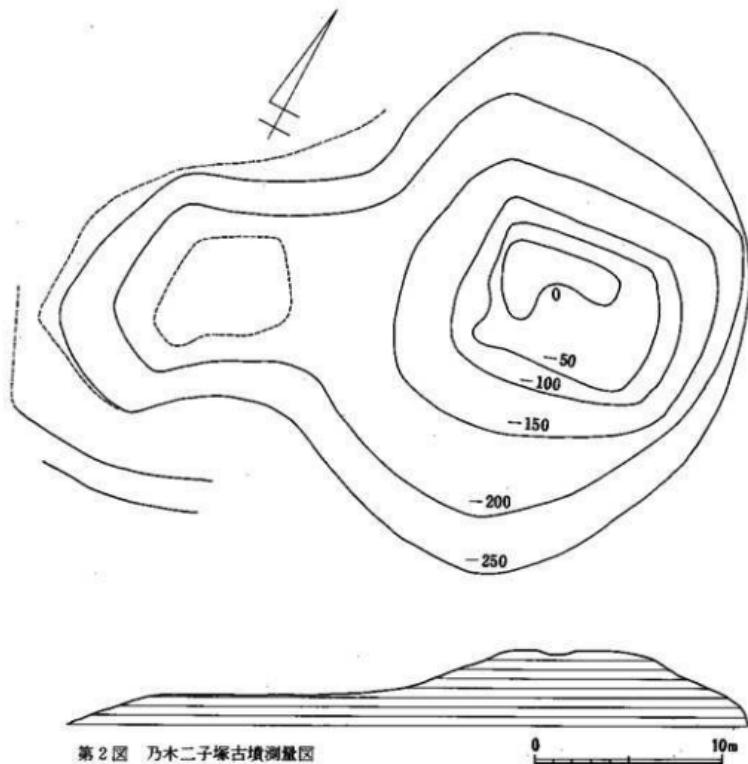


第1図 周辺の遺跡分布図

II 遺跡周辺の歴史的環境

遺跡は、松江市の市街地の東南部県道松江－宍道線から100mほど南へ入った低台地上に立地する。この台地は標高18m、隣接する水田面からの比高は10mを計る。分布調査の折、発見された須恵器片は、この台地の南部において発見された。土地所有者の話では、以前にも畠地を深掘りした時、土器が出土したという。

向荒神古墳は、野田遺跡のある畠地の市道を挟んで東側に立地する。台地の東部で、斜面になろうとするところの竹林に所在し、測量したところ、平面形は、方墳であるとは、



第2図 乃木二子塚古墳測量図

はっきりと断定出来ないが、円墳とは思えず、角の多い不定形を呈する。高さは、市道側から1.5m、東部竹林側で2.5mを計る。墳頂部は、さしわたり5×7mほどの部分が平坦面となり、その南部に荒神さんが現在でも地元民の手により、あつく祀られている。

向荒神古墳の周辺での古墳の分布には、ばらつきが見られる。北部上乃木地区ではそう多くないが、上乃木地区は早くから市街化されてきたので、あるいは、もっと密に古墳が存在していたのかも知れない。今のところ、比較的近くにある古墳では、経塚古墳(消滅)、乃木二子塚、二子塚、長砂古墳群が挙げられる。

^{鉛2} 経塚古墳については、すでに消滅しており、方墳であること以外、内容は全くわからぬ。乃木二子塚古墳は未調査であるが、昭和55年3月に古墳の東側裾の畠地を調査したところ、上端幅5m、深さ60cmほどの周濠が発見されている。周濠内出土の土器としては、古式土師器片、須恵器がある。古墳の平面形は前方後方墳で、中軸長で40m、前方部長15m、後方部一辺25m、高さ5mを計る。古墳の南側を丘尾切断して自然丘陵を切り離したもの、平地側(水田)の三方に周濠を穿ったものと思われる。

後方部に比べて、前方部が著しく低平であり、前期～中期にかけての大形古墳と思われる。

^{鉛4} 二子塚古墳も未調査であり、現在の姿は北側半分が水田地によって削平され、南半部も民家の裏庭にあたり、盛土が削られており、当初の面影はない。

台帳をみると現在円墳となっているが、昭和25年2月に山本清先生の略測されたところによると、一辺17×19m、高さ3mほどの方形墳のようである。この時検出された須恵器は、甕の口縁と円筒埴輪片で、古墳時代の中期頃のものである。

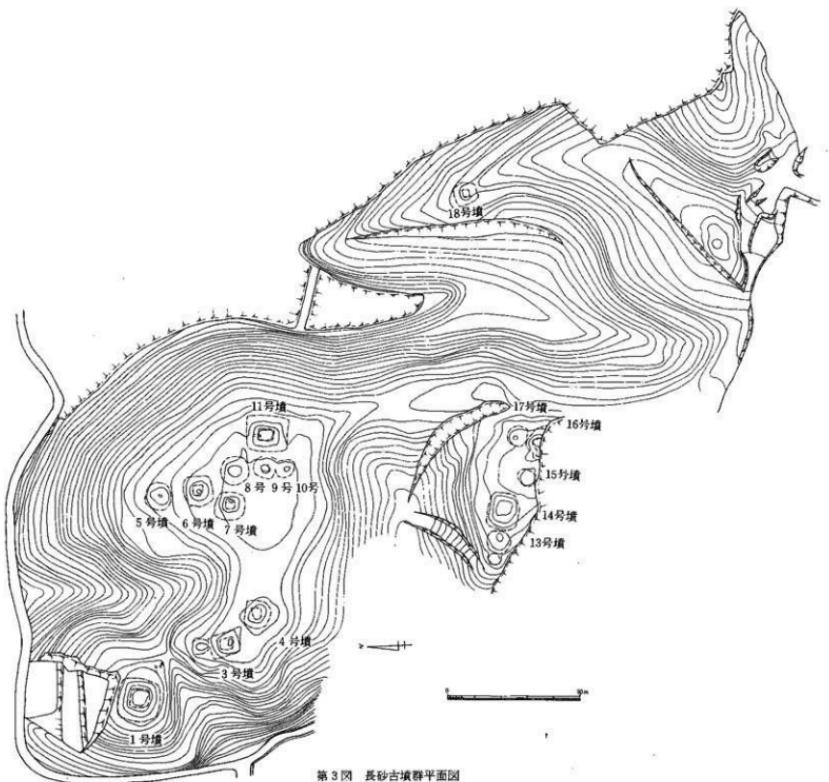
長砂古墳群は、乃木二子塚古墳のすぐ南側に派生する比較的平坦な丘陵に立地する。計17基の方墳が所在し、それは4群に分かれる。第1支群は、4基からなる。第2支群は7基、第3支群は5基、第4支群は1基から成る。

乃木土地区画整理事業のため、昭和55年7月から昭和56年1月にかけて、事前の発掘調査が実施された。

各古墳の内容の概要については、別表のとおりであるが、いずれも、一辺5～15m程度高さ0.5～1.5mほどの小規模～中規模の方墳で、盛土の比較的高い位置に、長さ0.7m～2.5m、幅0.3m～0.4m、深さ0.3mほどの狭少な土壇を有し、直葬したものと思われる。主体部の副葬品としては、第1号墳から直刀1、鉄鉗1、鐵鎌3、第4号墳からめのう製勾玉1、ガラス小玉4個が発見された以外は、全て、土師器や須恵器である。この内須恵器は駿に限定されており、しかも、西暦5C中葉から後半にかけての古式の段階のものであることが注意される。

長砂古墳群一覧表

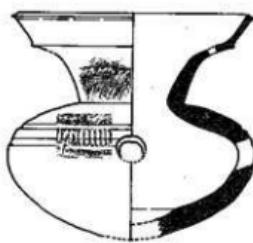
古墳番号	地形	墳丘規模		主体部規模		主体部内出土遺物	外部施設		主 体 部 外 出 土 遺 物		
		一辺m	高さ	長さ×幅	深さ		周 墓				
							北	東			
第1号墳	方墳	169×166	1.24	2.63×0.70	0.31	鉄製刀・鐵劍×2 土師器片少量	○		墳頂部表土下・大形土師器片		
第2号墳	不明 (推定)	84×85	0.38	不 明							
第3号墳	方墳	127×120	0.74	2.11×0.62	0.12	土師器座(上半分)×1					
第4号墳	方墳	115×121	0.82	2.29×0.69 (不定形)	0.11	鉄製直刀・曲玉×1 ガラス小玉×3 土師器片(蓋?)多數			墳頂部表土下土師器片多數 西側埴輪・広範囲に須恵器片		
第5号墳	円墳 (略)	119×80	0.55	1.79×0.56 (不定形)	0.08						
第6号墳	方墳	109×100	1.03	2.31×0.61	0.09	須恵器罐1/3程度			西側埴輪古式土師器片 北側埴輪・北側罐蓋 瓦片×1 南側埴輪片多數		
第7号墳	方墳	87×104	0.87	2.22×0.56	0.21	土師器座×1	○ ○ ○		6号・7号間の田地内に把手付鏡		
第8号墳	円墳 (略)	9.3 (径)	0.98	2.10×0.48 (推定)	0.20	土師器片7~8片			南側埴輪須恵器片×2個分 土師器高杯片×1コ分		
第9号墳	方墳	73×80	0.53	1.91×0.46	0.11		○ ○ ○		北側埴輪斜面土師器片少量		
第10号墳	方墳	54×61	0.42	2.32×1.33 (正長方形)	0.06		○ ○ ○				
第11号墳	方墳	128×132	1.41	2.41×0.54	0.18	土師器片×1			南北埴輪土器高杯4コ体分 “ ” 合 1コ体分 須恵器棒形器×1コ分		
第12号墳	古墳とは 隣接										
第13号墳	方墳	85×83	1.89	1.72×0.42	0.19	土師器片×1(細片)	○		東側周溝内土師器片		
第14号墳	方墳	22×110	1.19	2.13×0.42	0.19	須恵器罐×1	○ ○		東側埴輪土師器片多數 南側埴輪・茶良崩須恵器片		
第15号墳	円墳 (略)	8.6		4.75×2.75 (正長方形)			○ ○ ○				
第16号墳	方墳 (略)	74×70		0.86×0.36 (小形不定形)	0.15		○		北東周溝内土師器片(約被半分)		
第17号墳	方墳	73×68		不 明					北東埴輪把手付鏡少片 北東埴輪斜面土師器片(高杯)		
第18号墳	方墳	83×68	0.40	1.77×0.51	0.12		○		南側周溝内土師器片×1コ分		



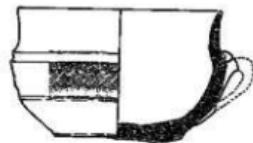
第3図 長沙古墳群平面図



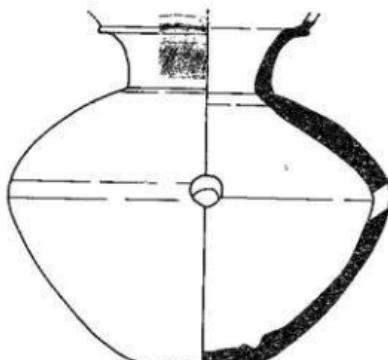
第8号墳出土上の頸



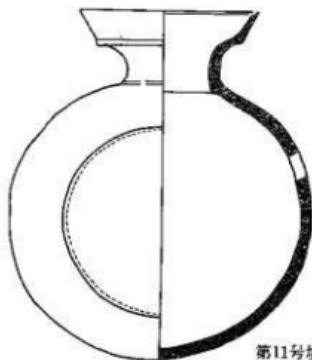
第4号墳出土の頸



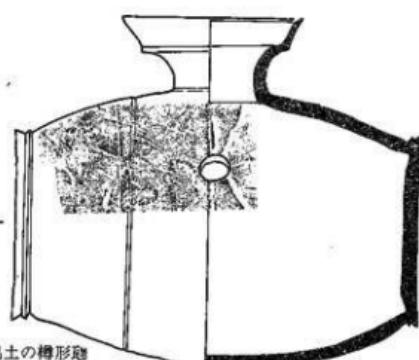
第6号墳と第7号墳
中間暗褐色層中出土把手付碗



第6号墳出土上の大形頸



第11号墳出土の梯形頸



0 5cm

第4図 長沙古墳群出土須恵器実測図

一方、土器は壇堀、もしくは、周溝からも多数発見されている。土師器の高杯や、壺、須恵器の壺、碗、把手付碗、杯身がある。

それらの土器は、古墳の築成の時点で祭儀が執り行なわれ、供獻されたものと考えられる。ともあれ、本古墳群は、次の2つの点で特徴的な性格をもっている。

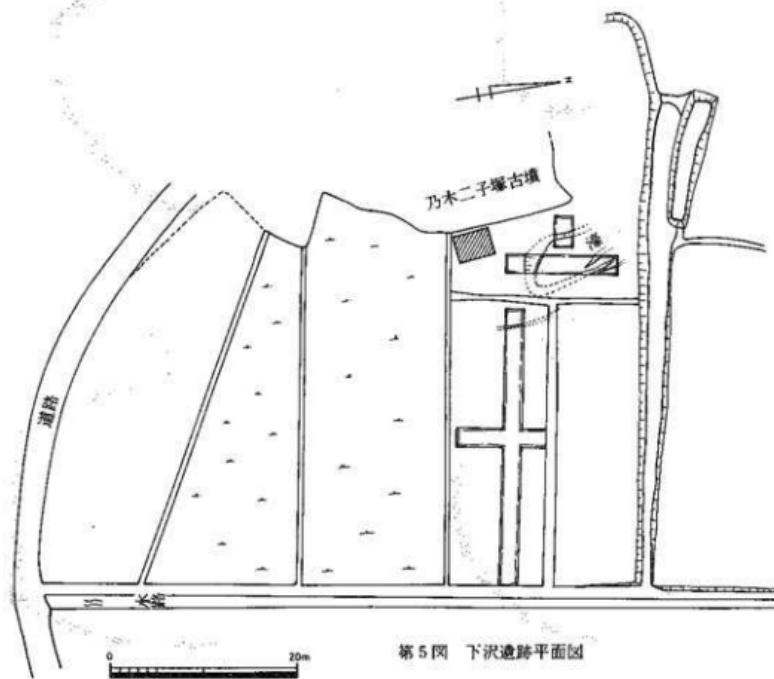
1) 盛土中に狭少で、いびつな土塙を有する。

2) 副葬もしくは、供獻された土器の示す時期から、この古墳群は、西暦5世紀中頃から後半にかけての極めて短期間の内に、連続起立的に構築されたものであろう。

この内1)は、松江市周辺におけるこれまでの調査例から判断するならば、一般的でない。又、5世紀代の中小古墳の調査例は、極めて少ない中で、これだけの規模の群集墳を形成していることは極めて珍らしく、出雲地方においては、必ずしも出塞的とはいえない様相を呈しているのである。

鉢6.

下沢遺跡は、乃木二子塚古墳のすぐ東側に隣接した畠地に所在する。以前から黒曜石や



第5図 下沢遺跡平面図



第6図 下沢遺跡出土石器(黒曜石)実測図

凹み石が採集されており、縄文時代の遺物散布地として注目されてきた。

昭和55年3月に、区画整理事業にともなって調査したところでは、おびただしい黒曜石のかけらに混じって、石器が発見された。しかし、縄文式土器はもとより、弥生式土器もなく、代わって古式土師器や須恵器が出土した。したがって、この地が、石器をはじめ各種石器の製作工房にはほど近いことは分かるが、必ずしも、縄文時代の遺跡とは断定出来ない。

長砂古墳群の西部の低丘陵上には、友田古墳他遺物散布地1カ所（方墳8基）や田和古墳群（前方後方墳1基、前方後円墳2基、方墳9基、円墳2基）があり方墳以外の古墳を含んでいる点に特徴がある。又、北側の丘陵に目を向ければ奥金見第2号墳ほか小規模の方墳や横穴が点在する。昭和54年7月に調査した論田2号墳、昭和55年9月の調査による
鉢7
塙ヶ谷1号墳では、それぞれ組み合わせ式の石棺が確認されている。論田2号墳の石棺は
塙8
蓋石3枚、側石4枚の平石によって構成され、蓋石の合せ目には小さい割石を配する。塙ヶ谷1号墳の石棺は側石を1～3段の、小口積みに積み上げ、蓋石を5枚の平石によって構成し、それぞれの接目に小さな角石を配しき間にうめている。これら2つの石棺は極めて類似するものであり古墳時代後期の検出例として注目される。

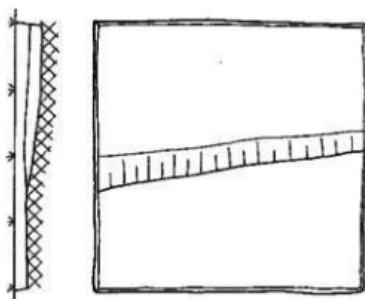
III 各 遺 跡 の 概 要

1. 野田遺跡

向荒神古墳に隣接した一帯の畠地と竹林は当初より、須恵器・土師器片の散布する地域であった。調査方法は南北方向より $55^{\circ} E$ を主軸として、野田遺跡全体を占む畠地内に 4×4 m のグリッドを、5カ所を設定し、北西道路側より 1～5 区とした。このうち地山面にある程度の加工のあるものは 1 区、2 区、及び 3 区である。

(1) 野田地区第 1 区

グリッドの中央部において東西にのびる段が確認された。落差はわずかに 15 cm ほどで、ゆるやかな斜面となっている。段の上部南側の地山面は、小規模なピットが確認されたが柱穴と考えられるしっかりしたものではなく、後世の畠地耕作にかかるものと思われる。



第 7 図 野田 1 区調査平面図

第 2 区

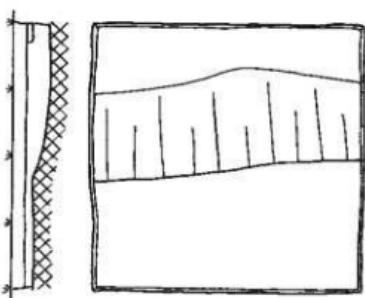
中央部において東西方向へののびる段が確認された。落差は 24 cm ほどで浅い。上端と下端の幅は平均 135 cm ある。この段は、1 区で確認された段と同一のものと思われる。

第 3 区

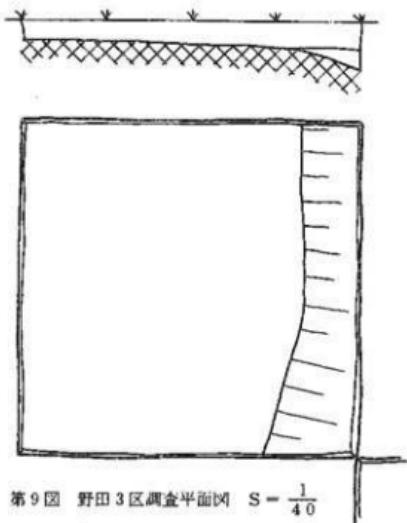
グリッドの東部において南北方向へ延びる段が確認された。落差は 24 cm ある。後世の畠地耕作のおりの搅乱であろう。

第 4 区、第 5 区

若干の深いピットがある他は地山面の変化は確認されなかった。



第 8 図 野田 2 区調査平面図 S - $\frac{1}{40}$



15区

このグリッドではピットが多数検出された。いずれも地山面で確認したもので、その上層から掘り込まれた可能性もある。

ピットは計14個あり、周囲にも広がっているものと思われるが、隣接して調査した10区ではピットは1個も検出されていないので、そう広範囲には分布していないものと思われる。

ピットの内、明らかに柱穴と思われるのは西側の壁近くにあるもので、上端幅40cm、深さは38.6cmを計る。それ以外のピットはいずれも5~20cmの範囲のもので比較的浅く柱穴かどうか断定出来ない。

これらのピットがいつ頃掘り込まれたかは遺物が伴わないのでよく分からぬ。出土遺物は、上層から明治以後の陶磁器片が出土したのみで地山面には皆無であった。

28区

グリッドの北と南において東西方向へ延びる幅広い溝を検出した。いずれも地山である黄色粘土を穿ったものである。南の溝は上端幅1.7m、下端幅16~28cm、深さ40cmを計る。断面はV字形に近いものである。

北の溝は半分しか検出してないが、深さ36cmあり、断面U字形になるしっかりした溝である。

(2) 当貫地区第5区

地山面には、南北方向に深さ20cmほどの平行な溝が6本確認された。この溝は後世の畑地耕作のおりにつくられた畦と思われる。出土遺物は上層に明治以後の陶磁器片が若干採集された程度である。

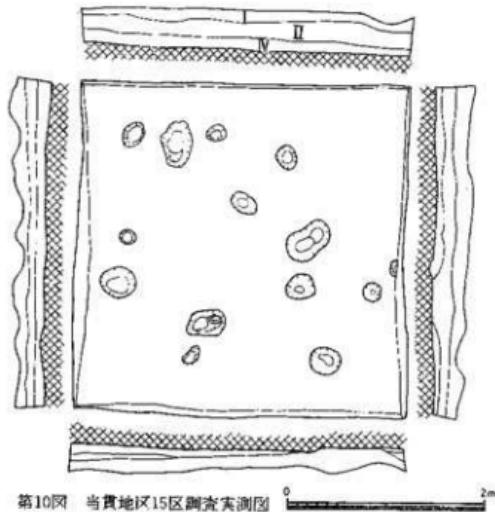
10区

地山面は、平坦地で地山に掘り込んだピットなど遺構は全く確認されなかった。出土遺物はやはり上層で明治以後の陶磁器片、ガラス片が採集されたのみである。

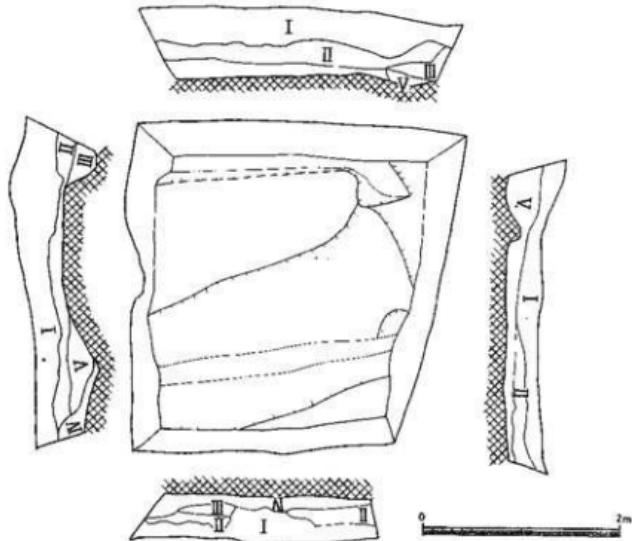
33区、38区

地山面は黄色～明褐色の粘性土で北東の方向へ傾斜している。両区の中間の土層観察用壁を狭んで東側に深さ10cmばかりの落ち込みが認められ、上層が黒色、下層には灰褐色の土層が堆積していた。この落ち込みは両区の東側つまり市道の真下に続いている。

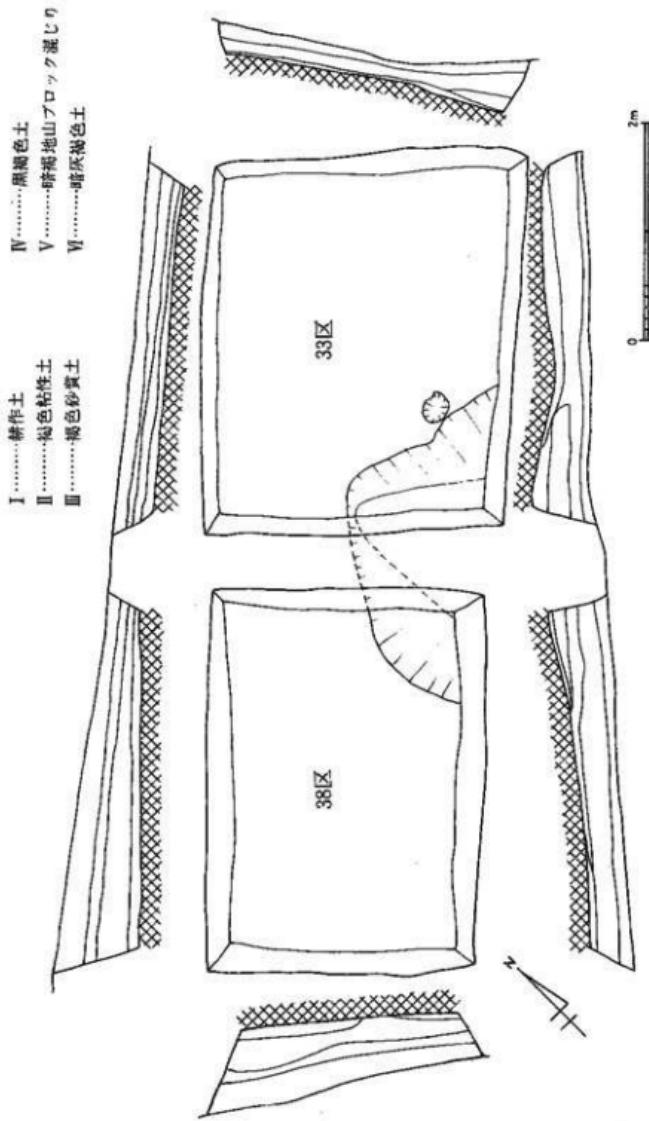
後述するように、この溝は向荒神古墳の周濠の一部で北西のコーナ附近にあたることが判明した。



第10図 当貫地区15区調査実測図



第11図 当貫地区28区調査実測図



第12図 当實地区33区・38区実測図

2. 向荒神古墳

(1) 古墳の現状と調査の方法

測量したところ、現在の平面形は必ずしも方形ではなく、竹林に面した東側の墳丘斜面は、他の斜面に対して鋭角となっている。墳丘の西側、特に角部は、市道によって削平され原形を知ることが出来ないが、西南向きと、西北向きの斜面は、ほぼ直角に屈折するようであるので、この両斜面は現在まであまり変形していないものと思われる。両斜面から推定する古墳の一辺はおよそ $14 \times 17\text{ m}$ ほどで、高さは 2 m、墳頂部には、さしわたし $5\text{ m} \times 7\text{ m}$ ほどの平坦面を有する。

墳頂部には、たびの老木があり、神木にはわら蛇が祀られ、「向荒神」として地元の人々に信仰されている。「向荒神古墳」と呼ばれる所以である。

市道を挟んで西側の山林斜面は、古墳の斜面に平行するかのように、急激に落ち込んでいる。もし後世の加工でなければ、古墳築成にあたって、当時周辺の土をかなり削り取ったものと思われる。この急斜面は、その名残りであろう。

古墳の東側は竹林で、東へ向かって傾斜している。

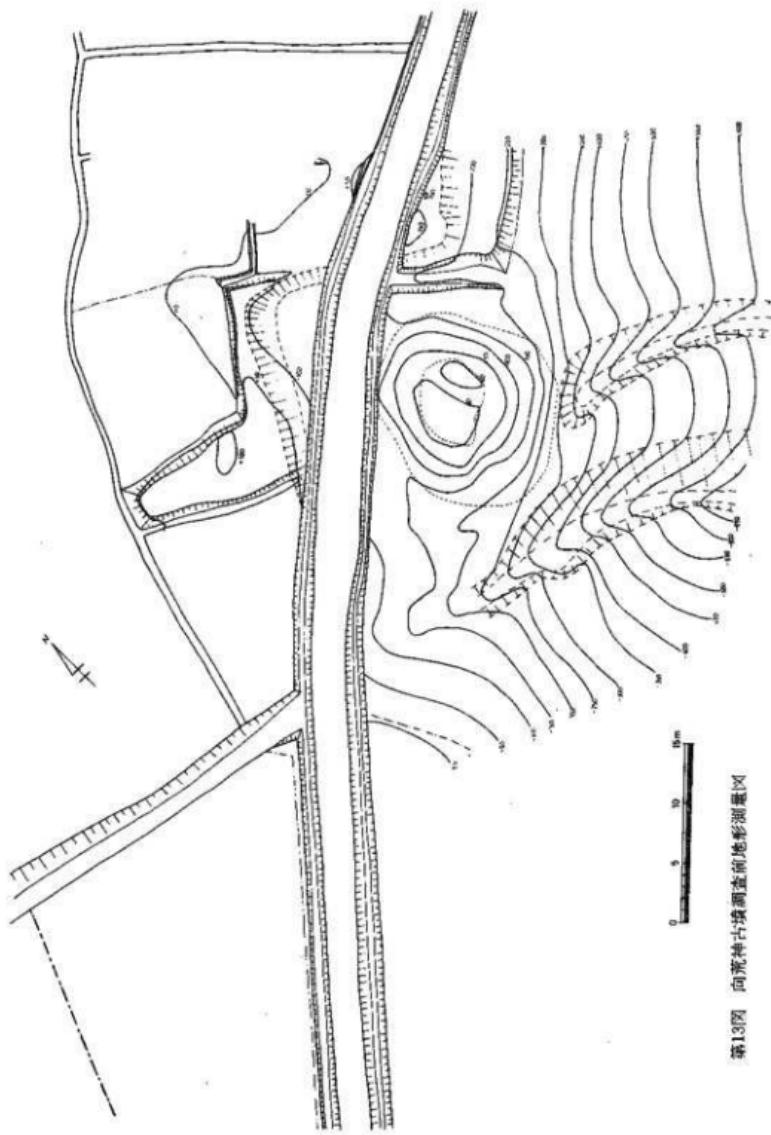
道路改良工事の計画では、現在の市道当貫野田線の部分とその西側の畠地が、平均 5 m ほど削平されることになっている。又、古墳の南北両側にも側道がつき、特に南側には、荒神さんへの上がり降りの階段がつくことになっており、古墳周辺の様相は一変することになる。

発掘調査は、工事によって削平される部分について、地山面まで掘り下げ、古墳の周濠の有無、古墳の平面形、古墳に関係すると思われる遺構、遺物の確認に主目的を置き、古墳本体については調査しなかった。

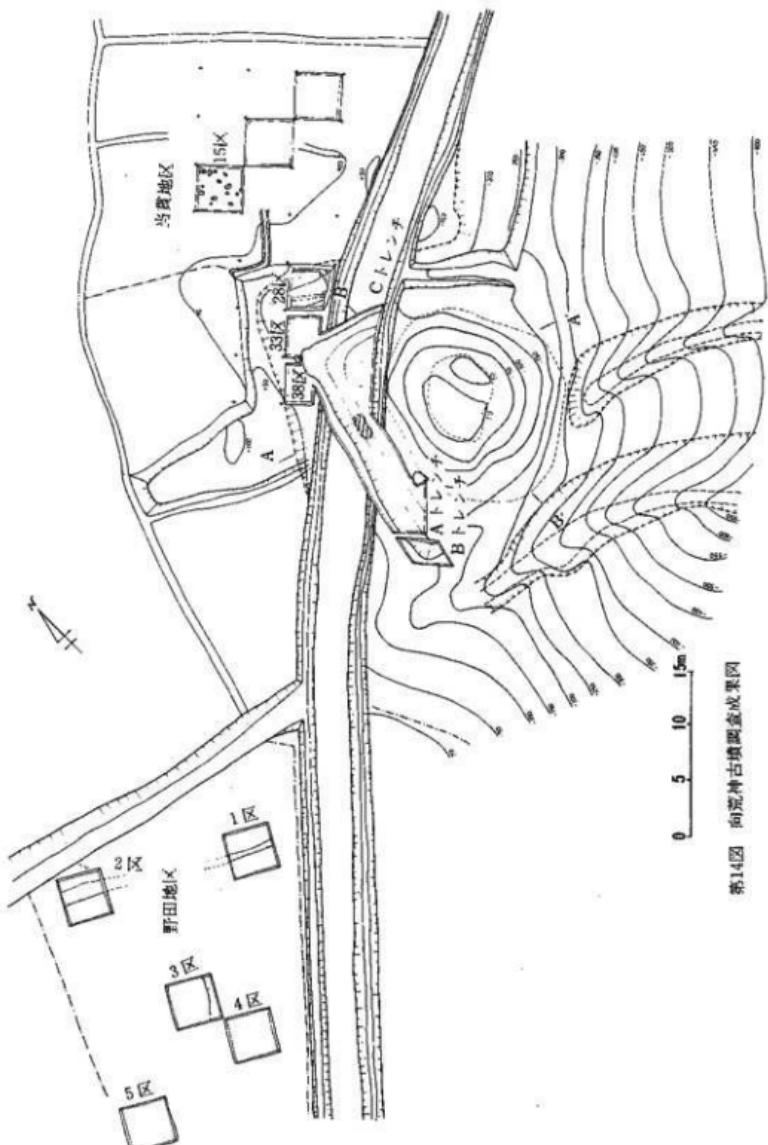
(2) 遺構

古墳の南側隣接地について、A トレンチを設定し、調査したところ、深さ 96 cm、上端幅 4.16 m、下端幅 86 cm の濠が確認された。濠内の堆積土は一様に黒褐色土であった。これは、南北方向に走り、しかも古墳の西側斜面に平行していることから、これが向荒神古墳の西側の周濠に相当するものと断定した。さらに周濠の屈折部を確認するため、A トレンチの東側竹林内に B トレンチを、西側市道部分に C トレンチを設定した。B トレンチではその東端付近で濠の上端の線が、ほぼ直角に折れ曲がっていることを確認した。

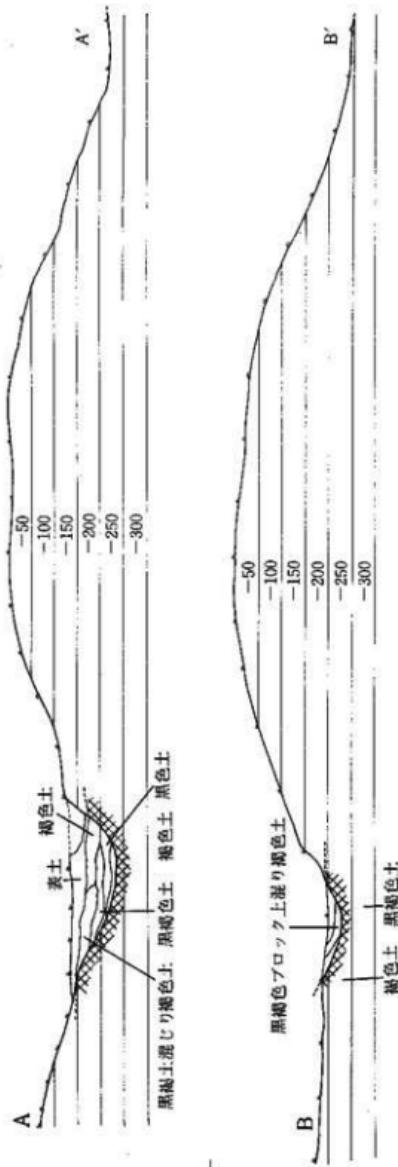
C トレンチでね、周濠はまっすぐ市道の下を走り、対岸の山林に続いている。この部分では、市道によって後世上部が削平されているので、濠は、下半部がわずかに遺存していたに過ぎない。市道直下での濠の現存上端幅は 1 m、下端幅は 1.7 m、深さは 28 cm ほどを計る。



第13图 向荒冲占境内查前地形测量图



第14図 向荒神古墳調査成果図



第15図 向雲神古墳ふん丘及び周溝断面図

市道の下を走る濠は、対岸の山林に設定したグリッドの内、第33グリッドと第38グリッドの中間畦付近ではば直角に屈折し、再び市道の下をくぐり、古墳の北側に向けて一直線に走っている。

のことから周濠の屈折部が2カ所あり、その内側下端すなわち墳裾の一辺は18mあることが確認された。そして、濠の横幅は、市道部分では削平され不明確であるが、古墳の南側で確認したところ、上端幅4.16m、下端幅0.86m、深さ96cmの比較的大規模な周濠である。又、周濠の底部のレベルは、水平ではなく西側に向けて高くなる傾向がある。すなわち、東の屈折部付近より、西の屈折部の方が50cm高いことが分かった。このことは本古墳が、現地形から推測して、台地の中央尾根部というよりは、やや東向きの斜面に立地しているにもかかわらず、濠の深さを絶対的に水平面とせず、旧地表から相対的に一様のものとしたためと思われる。

結果としては、排水機能としての性格は、後世まで十分に温存されていたと考えられる。それは、後述するように、Aトレンチの濠底に密着して奈良後期から平安期にかけてのものと思われる糸切底の环身の破片が、又、Cトレンチの市道直下の濠底では平底の壺が一括発見されたことにより、少なくともその頃までは殆んど周濠に堆積物は無かったと考えてよいのである。

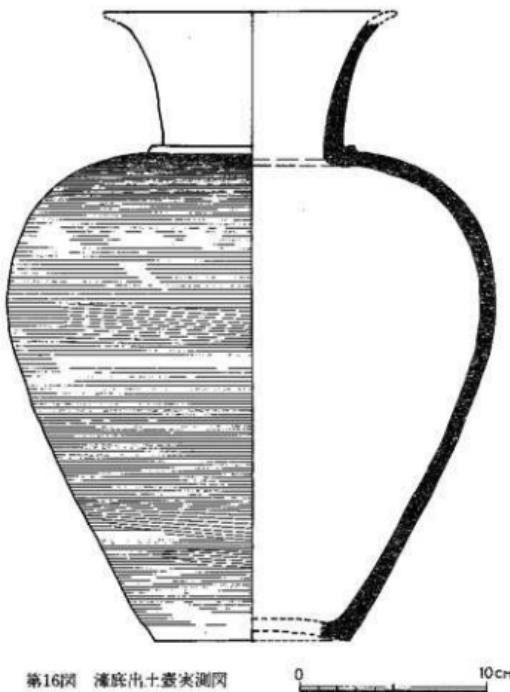
(3) 遺物

1. 壺 推定器高33.6cm、推定口縁径15.6cm、頸部径9.6cm、体部最大径26cm、底部径10.4cmを計る。体部の一部と口縁端部、底部の大半を欠失している。

Cトレンチの濠底から出土。2.5m×1mの範囲に集中していた。体部外面は、全体に水平方向のカキ目調整を施している。体部内面はおおまかに横ナデ調整を施し、器内を叩きしめた形跡はない。底部は平底でやや上げ底となる。底外面の調整はナデている。頸部には高さ3ミリほどの突帯がまわる。口縁部は外反しその端部は、遺存していないので不明だが、単純口縁もしくは突帯を受けた肥厚口縁が考えられる。この種の須恵器は県内、県外共に類例が無く比較出来ないが、短頸壺の器形の影響を受けており、頸部の突帯と底部は平底である点が特徴である。これらの点からこの須恵器はおおむね9世紀以後の所産になるものと思われる。（第16図）

2. 壺 器高4.4cm、口縁径12cm、底径9cmを計る。底外面に糸切り痕跡を残し、口縁部はほぼ直立する。8世紀後半から9世紀にかけてのものであろう。Aトレンチの濠底から出土。（第17図）

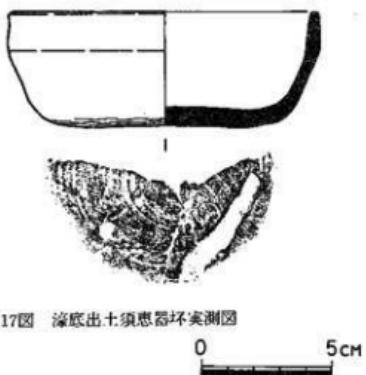
3. 壺の破片に混じって出土。器肉1.1cmほどで外面に平行叩き目、内面に浅い同心内文を付ける。4.は厚み0.8cmの壺の小片である。5.は厚み1~1.1cmあり、外面は磨耗し



第16図 深底出土壺実測図

ている。内面は深い同心円文を押圧している。(第18図3、4、5)

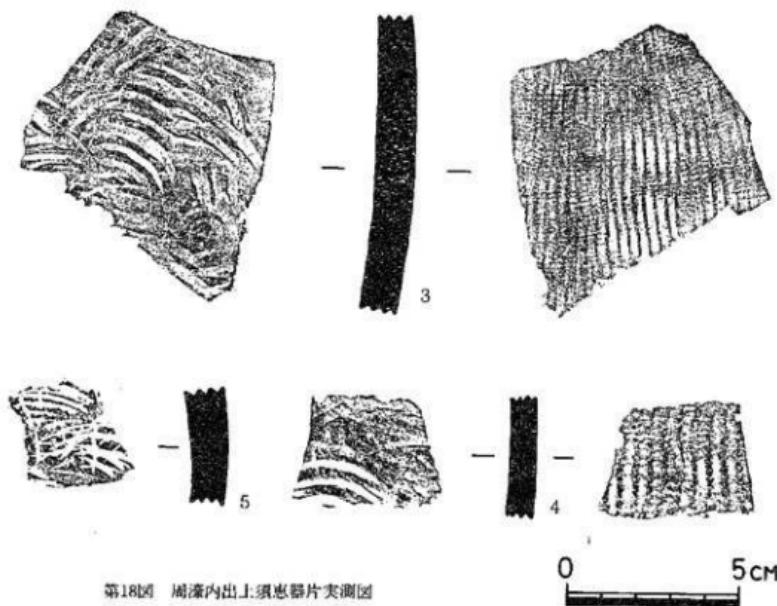
以上の事実から壺や杯は本古墳とは無関係のものとして取り扱ってよいだろう。又、壺片にしてもおおまかに古墳時代後期以後のものとしか分からぬ。したがって、濠内出土品から本古墳の築造時期を推定することにはいささか無理がある。むしろ、濠底から新しい時代の須恵器が出土したことの意



第17図 深底出土須恵器壺実測図

味がより重要であろう。そこで考えられることの2つの意味の内、第1は、前述したように奈良・平安期まで濠に堆積物が殆んど無かったことを示している。第2は、奈良・平安期に故人を追慕するためにまだ墓としての認識の残っていた古墳の裾で墓前祭がとり行なわれ、その際使用された土器が濠内に落ち込んだことが考えられる。古墳の裾から糸切底を有する杯など奈良・平安期の土器

が発見された例は、松江市内でも、矢田町才ノ峠古墳、奥第1号墳、第4号墳、石屋古墳などがあり、はたして全て偶然の所産とみなしてよいかどうか、今後は検討を要する問題である。



第18図 周濠内出土須恵器片実測図

ま　と　め

本古墳群の西部と南部について調査したところ、次の事実が判明した。

- 1) 向荒神古墳の周囲には、濠がめぐり、その上端幅は4.16m、下端幅は0.86m、深さは0.96mあり、四周の一辺は西辺外側で2.05m、内側で1.8mを計る。
- 2) この周濠のすぐ内側に古墳の墳丘部分があったと仮定すれば、周濠内側の線と等しくなり、古墳の墳丘の一辺は18mあったものと考えられる。
- 3) 周濠の基底部から発見された須恵器の内、平底の壺や糸切底の环身は奈良後期から平安期にかけてのものであり古墳との直接の関係はなさそうである。他の壺片は古墳時代後期以後に通有のものである。これだけの出土遺物から本古墳の築造年代を推定することは困難であるが、大規模な周濠を有することからあるいは古墳時代の中頃までさかのぼることも考えられる。

いずれにしても、以上の事実から本古墳は、一辺18mの方墳で、りっぱな周濠を有し、乃木地区では最大級の方墳であることが分かった。このことは島根県内の大型方墳に比較してもそうひけをとらないものである。

ここでひとつ問題となるのは、周辺地区にある大型古墳、とりわけ、山代古墳群中の大庭鶴塚や乃木二子塚古墳、二子塚古墳が、いずれも丘陵の尖端を削って切り離し、その部分を濠のように見せかけながら、水田地に望むような形をとっているのに対して、本古墳は、あくまでも台地の中にわざわざ空濠をめぐらしていることである。これと同じような立地形態を有するものには、5世紀末頃の井ノ奥第4号墳などに見られるが、大半の古墳では見受けられない。丘陵上に立地する古墳の周濠の有無が全く観念上の所産の違いなのか、それとも、もっと大きな政治的な制約にもとづくものかは、今のところはっきりしない。

いずれにせよ、付近にそう密な古墳分布はなく、本古墳そのものも古墳群を形成していないことから見ると、当地域で相当な勢力を有した豪族の奥津城であったことには違いないだろう。

- 注1 島根県教育委員会「島根県遺跡目録」昭和50年3月
松江市教育委員会「松江市の埋蔵文化財」1980
- 注2 注1と同じ
- 注3 山本清「出雲国における方墳と前方後方墳について」(島根大学論集第1号)
1951
- 注4 注1と同じ
- 注5 山本清氏の踏査野帳による。
- 注6 注1と同じ
- 注7 松江市教育委員会「論田遺跡発掘調査報告」昭和55年3月
- 注8 松江市教育委員会「噴ヶ谷古墳群」1981
- 注9 島根県教育委員会「国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書」
1977
- 注10 松江市教育委員会「史跡大庭鶴塚発掘調査報告」昭和54年3月
- 注11 岡崎雄二郎「松江市井ノ奥第4号墳の調査」(考古学ジャーナルNo.120号)1976



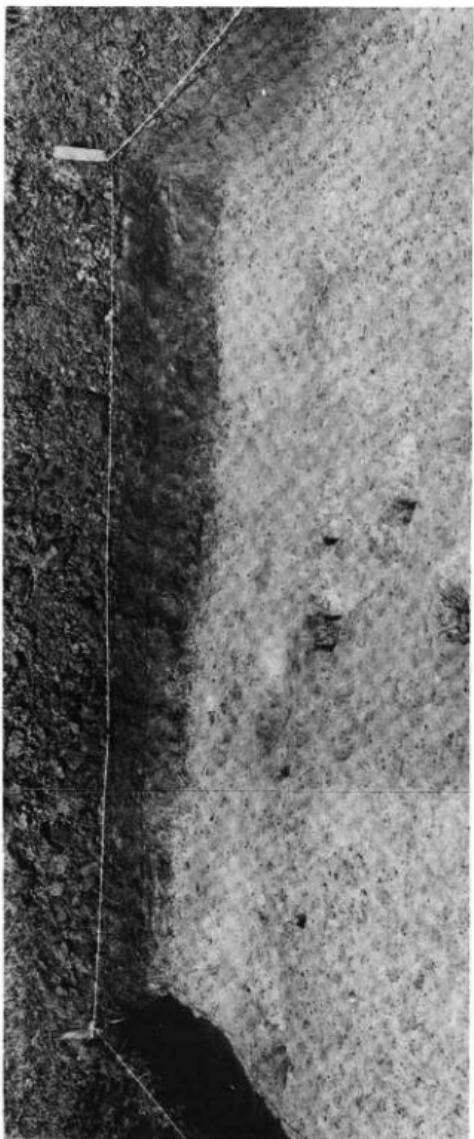
① 遺跡遠景(長砂古墳群からみる)



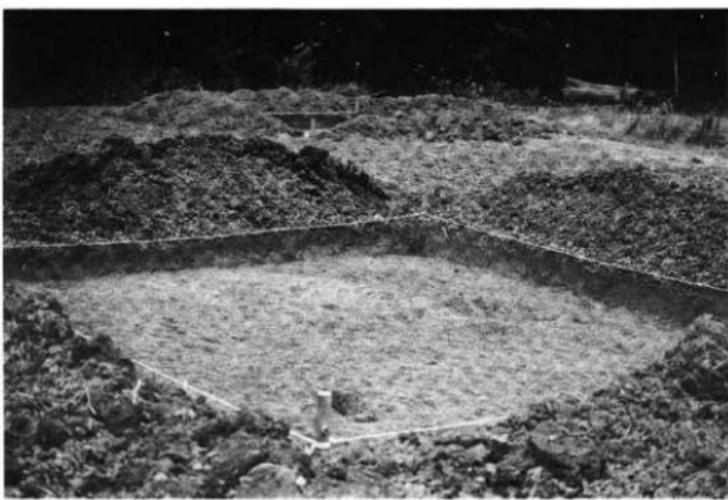
② 野田遺跡近景

③ 野田1区





④ 野田2区

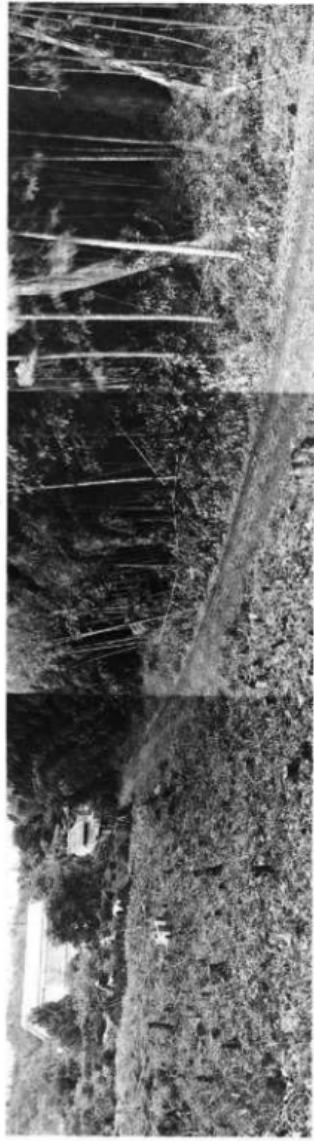


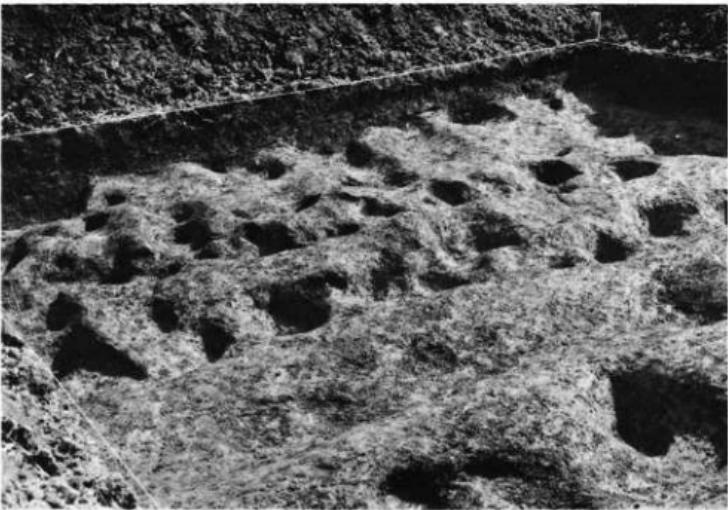
⑤ 野田 3 区



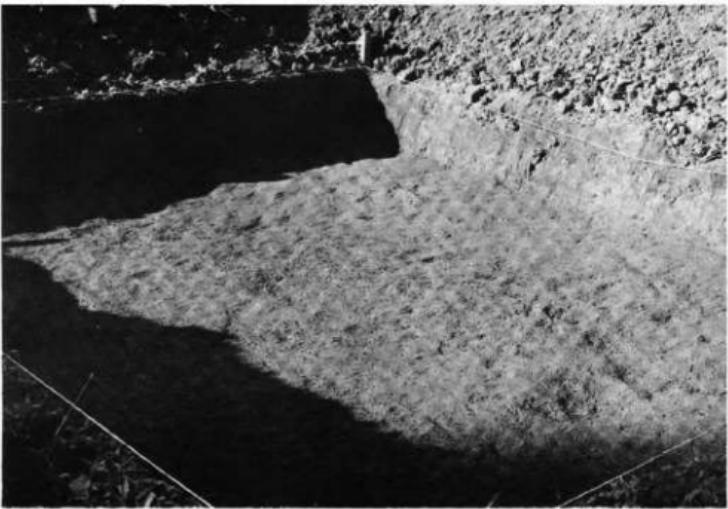
⑥ 野田 5 区

⑦ 当寅地区全景（右向荒神古坟）



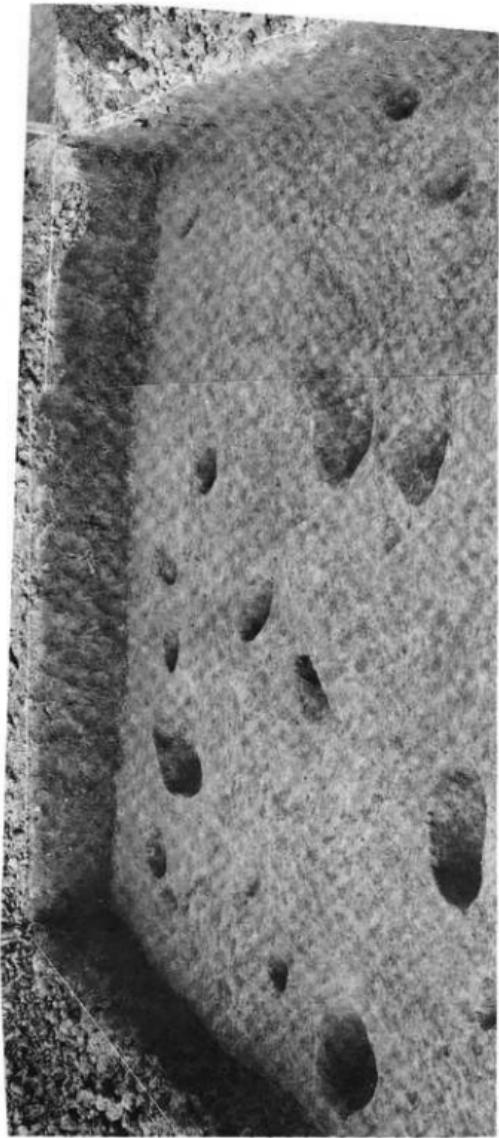


⑧ 当貫5区



⑨ 当貫10区

⑪ 当貴15区





⑪ 向荒神古墳周濠(手前北西角付近)



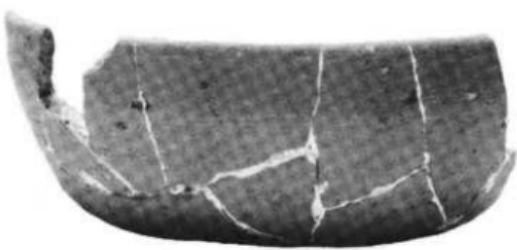
⑫ 当貫33区南東角落ち込み(古墳周濠角部)検出状況



⑬ 向荒神古墳周濠北西角付近



⑭ 向荒神古墳南部 B トレンチ、周濠底須恵器壊身出土状況



⑯ 上 須惠器坏身
下 壺